

社 会

(2020年度)

《注 意》

1. 試験開始の合図があるまでは、問題用紙を開けてはいけません。
2. 問題用紙は8ページまであります。解答用紙は2枚です。試験開始の合図があったら、まず、問題用紙、解答用紙がそろっているかを確認、次に、すべての解答用紙に「受験番号」「氏名」「整理番号（下じきの下方の番号）」を記入しなさい。
3. 試験中は、試験監督^{かんとく}の指示に従いなさい。
4. 試験中に、まわりを見るなどの行動をすると、不正行為^{こうい}とみなすことがあります。疑われるような行動をとってはいけません。
5. 試験終了^{しゅうりょう}の合図があったら、ただちに筆記用具を置きなさい。
6. 試験終了後、試験監督の指示に従い、解答用紙は書いてある方を表にして、上から、(その1)(その2)の順に重ね、全体を一緒に裏返^{いっしょ}して置きなさい。
7. 試験終了後、書きこみを行うと不正行為とみなします。

次の文章をよく読んで、5ページから8ページの問いに答えなさい。

今日、皆さんはどのような衣服を着てきましたか。私たちは毎朝、どのような衣服を着ようかと考えます。暖かいか、寒いか、誰と会うのかなどによって衣服は変わります。衣服と社会との間にはどのような関係があるのでしょうか。ここではシャツやセーター、ズボン、靴といったものだけではなく、髪型や、口紅などの化粧、ピアスのような装飾品も含めて考えていくことにします。

1. 世界各国の衣服

四季がある日本では、暑さや寒さをしのぐために季節にあった衣服を着ます。同様にア、世界各国でも自然環境に応じてさまざまな衣服が見られます。たとえば、気温や湿度が高い地域には男女とも腰巻布を身につける国があります。ズボンよりも風通しがよく、熱を逃がしやすいという性質があるからです。また、日差しが強く乾燥している地域では、あえて全身を覆うような衣服を着て、頭を布で覆うことがよく見られます。これは日差しから肌を守るとともに、身体から水分が蒸発しないようにするための工夫です。さらに、寒い地域では動物の毛皮を衣服に利用することもありますし、ポンチョのような、穴の開いた布をかぶるように着ることで熱を逃がしにくくしている衣服も見られます。

一方で、特定の文化のなかで発展した衣服もあります。(あ)を信仰する国ぐにのなかには、女性が頭や顔を布で覆っている国もあります。これは(あ)の教えに「女性は他人に肌や髪を見せてはならない」というものがあるからだといわれています。このように世界では自然環境や文化にあわせてさまざまな衣服が生まれてきたのです。それでは、日本ではどのように衣服が変化してきたのか、歴史を追って見ていきましょう。

2. 日本における衣服の歴史

昔から日本で着用されていた衣服といえば、まずは着物が想像されるでしょう。たしかに着物は日本の伝統的な衣服といえます。ですがひとくちに着物といっても、平安時代の貴族の女性が着ていた十二単のようなものから、私たちが夏祭りのときに着る浴衣のようなものまで、さまざまな種類があります。現在の私たちが目にする着物は、おもに「小袖」とよばれる種類のものです。もともと公家や武家が儀礼の際に着ていた着物を「大袖」というのに対し、「小袖」は江戸時代以降に定着した普段着であり、身分を問わず広く着られていました。江戸時代もなかばをすぎると、江戸や大坂を中心に町人文化が花開くなかで、イ、さまざまな素材や模様が入った小袖が流行しました。このことはウ、評判の美人や歌舞伎役者を描いた浮世絵からも分かります。ただし当時は、町

人や百姓^{ひやくしやう}たちが自由に衣服を楽しもうとしても、さまざまな制約がありました。武士以外の人たちが武士の衣服をまねることはできませんでした。また江戸幕府は、町人や百姓たちがあまり派手な衣服や高価な素材を使った衣服を着ないよう、たびたびぜいたくを禁止する命令を出しました。

エ. 明治時代^{めいじ}になると政府が洋服^{ふきゆう}を普及させようとしてしました。まず軍隊に西洋式の軍服が、さらに警察官や鉄道員、郵便局員にも洋風の制服が採用されていきました。また政府は武士の帯刀を禁止し、政治家や役人が率先^{そつせん}して洋服を着るようになりました。着物のことを「和服」とよぶようになったのも、洋服が日本に入ってきてからのことです。男性には職業などを通じて洋服が広まりましたが、女性にはなかなか広まりませんでした。

1929(昭和4)年にアメリカ合衆国^{がしゅうこく}から(い)が始まると、日本も経済が行きづまり、土地や資源を求めて対外進出をすすめていきました。戦争が本格化すると生活物資が不足し、衣服も足りなくなりました。1940(昭和15)年になると政府は国民服令を出して、軍服に似たデザインの衣服を国民服とし、男性に着用を義務付けました。やがて洋服店は国民服一色になり、ほとんどすべての成人男性が国民服を着用するようになりました。女性についてはぜいたくやおしゃれが悪いものとされ、戦争が始まるまでは大流行していたパーマが好ましくないものとされました。やがてほとんどの女性が、江戸時代から各地の農村で使用されてきたもんぺというズボンのようなものを着用するようになりました。戦争が長期化し、ますます物資が不足すると、1942(昭和17)年には布地は食料などとともに(う)制となり、切符^{きつぷ}との交換^{こうかん}で割り当てられるようになりました。物資^{とぼ}が乏しかったために、これは戦後もしばらく続きました。

終戦直後は布地^{よゆう}を買う余裕などありませんでしたが、オ. 戦後の復興期から高度経済成長期を通じて洋服が広まっていき、和服を着ることがふつうだった女性たちの間でも洋服が定着しました。

戦後しばらくの間は、洋服は家庭でミシンを使って自分たちで作るか、仕立て屋で自分にあわせて作ってもらうことがほとんどでした。しかし1960年代後半になると、サイズや年齢^{ねんれい}などに応じて、すでにできあがった洋服^{はんぱい}が販売されるようになりました。こうして、洋服を製造・販売する産業

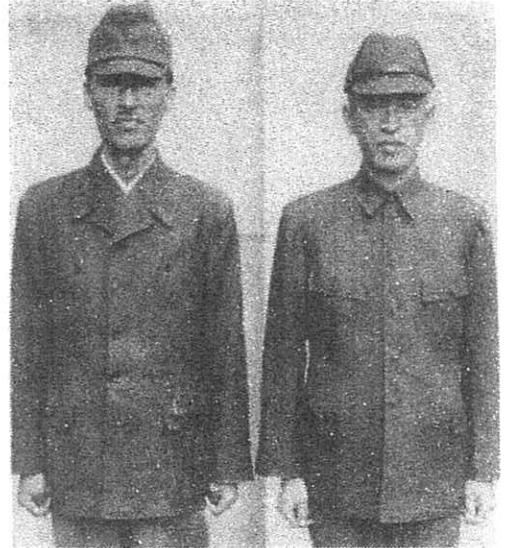


図1 国民服を着た男性



図2 もんぺを着用した女性

が大規模化していきました。カ. このようにあらかじめサイズなどが決まっている衣服を既製服とよびますが、現在では工場で大量生産された既製服を着ることが主流になっているのです。

3. 衣服と産業

では、皆さんが着ている衣服はいついどこの工場で作られたものでしょうか。衣服の内側に付いているタグを見ると書いてありますが、普段着のほとんどは中国(中華人民共和国)やベトナム、バングラデシュなどで作られていることが分かります。

しかし、かつては私たちが着ている衣服はおもに日本国内で作られていました。東京や大阪などの大都市に衣服工場が集中し、多くの人びとが働いていました。高度経済成長期になると、衣服工場は大都市ではなく東北地方や中国地方などの地方の農村部に多く立地するようになります。人手に余裕があり大都市に比べると賃金が安かったことが理由でした。

1980年代になると、地方の賃金も上がってきたため、日本よりも賃金の安い外国、なかでも日本から近く、労働者も多くいる中国に進出する企業が現れました。その後、中国も経済が発展して賃金が上がったため、賃金のより安いベトナムやバングラデシュなどに工場を移す企業が多く見られるようになりました。キ. それでも日本企業の工場が中国からなくなってしまったわけではありません。

ク. 近年、人件費の安いこれらの国ぐにで、衣服がこれまでになかったような規模で大量生産され、世界中で低価格で販売されるようになっていきます。このような衣服はファスト・フードのように安くて手軽なためにファスト・ファッションとよばれています。ファスト・ファッションを販売する店舗では毎日のように売れ行きがチェックされ、つねに流行にあわせた売れ筋の衣服が並べられています。以前よりも人びとは格段に多くの店舗で、多くの衣服を低価格で買うことができるようになっていきます。

衣服を製造する企業は、流行を追って新たな商品を作っています。しかし企業自身が流行をつくりだしてもいます。人びとは流行を自分から追いかけているように思っていますが、実は広告などの力により、企業が生みだした流行を追いかけるように仕向けられてもいるのです。企業にとって流行をつくりだすことは簡単ではありません。しかし、ケ. 企業は、ある流行をつくりだすことに成功したとしても、流行している衣服の製造を意図的にやめることもあります。

4. 衣服と「らしさ」

ところで、学校や会社などでは流行を追った衣服ではなく、制服のように皆が同じ衣服を着ることが好まれます。このようなどころでは、生徒らしさや会社員らしさのような「らしさ」が求められま

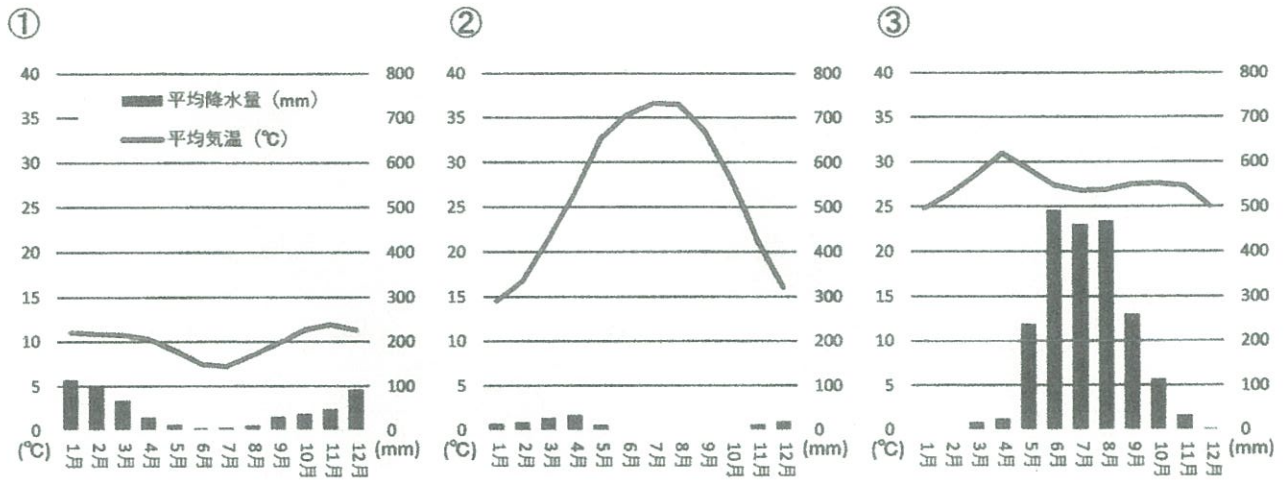
す。そして、制服が「らしさ」を表す役割を担^{にな}っているのです。

この「らしさ」について考えてみましょう。体型に^{ちが}違いのない生まれたばかりの^{あか ぼう}赤ん坊でさえも、男の子は男の子らしい衣服を着せられ、女の子は女の子らしい衣服を着せられます。こうしているうちに、男性はズボン^はを履きネクタイ^しを締めることが男性らしいと思い、女性は化粧をしたりスカート^をを履いたりすることが女性らしいと考えるようになります。しかし、世界を見ると男性がスカートのような衣服を着るところもありますので、コ. 私たちが当然と思っている衣服についての考え方は、かならずしも当たり前のもではなさそうです。

ここまで、衣服が場所や時代によってさまざまに変化してきたことを見てきました。サ. 衣服はその社会を映し出す鏡といえるかもしれません。そして、衣服は暑さや寒さを防ぐといった実用的な目的以外にもさまざまな目的や意味をもっていることも分かったでしょう。たとえば男性のネクタイは実用的とはいえませんが、おしゃれをして自分の^{しゅみ}趣味や好みを表現するという役割ももっています。しかし、ときにシ. 衣服に対する考え方の違いから、問題が起きることがあります。衣服は「^{ひふ}第二の皮膚」といわれるように、私たちにとってあまりにも身近すぎるので、それについてあまり深く考えることがありません。衣服との付き合い方を考えることは、社会そのものを考えることにつながるかもしれません。

問1 文中の空らん(あ)～(う)にあてはまる語句を答えなさい。

問2 下線部ア. について。下のグラフ①～③は、それぞれある都市の気温と降水量を示したものです。これらの都市で着用されている衣服として適当なものを下の写真あ～えのなかから選び記号で答えなさい。



あ



い



う



え



問3 下線部イ. について。現在でも地域ごとに独自に発展した織物が伝統産業として残っています。下の①～③の織物の産地として適当なものをそれぞれ地図中のあ～おのなかから選び記号で答えなさい。

① 小千谷ちぢみ

…麻を織って作られる布を雪にさらし、白さを際立たせる技法が用いられてきた。

② 結城紬

…かつては汚れなどで売り物にならなかった繭からつむいだ糸で作られていた。

③ 西陣織

…高級織物として知られ、明治時代にいち早く外国製の自動織機が導入された。



問4 下線部ウ. について。評判の美人や歌舞伎役者を描いたさまざまな浮世絵を、江戸の人は買い求めました。それはなぜでしょうか。以下の浮世絵を参考にしながら答えなさい。



問5 下線部エ. について。下の二つの絵は、当時日本に住んでいたフランス人画家が、鹿鳴館の様子を描いて、洋服を着た日本人を風刺したものです。どのような点を風刺したのでしょうか。二つの絵に共通することを答えなさい。



鏡を見る夫婦



舞台裏の女性たち

問6 下線部オ. について。戦後の復興期から高度経済成長期にかけて、都市部を中心に洋服が広まりました。なぜ洋服が人びとに支持されたのでしょうか。時代の様子を考えて二つ答えなさい。

問7 下線部カ. について。衣服を自分たちで作るか仕立ててもらう時代から、既製服を買う時代に変化したことで、衣服に対する考え方も変化しました。どのように変化したのでしょうか。答えなさい。

問8 下線部キ. について。経済発展により賃金が上がっているにもかかわらず、なぜ日本の企業は中国に工場を残したのでしょうか。理由を答えなさい。

問9 下線部ク. について。ファスト・ファッションの世界的な広がりには社会にさまざまな問題を生みだしています。どのような問題を生みだしているのでしょうか。二つ答えなさい。

問10 下線部ケ. について。なぜ企業は流行している衣服の製造を意図的にやめてしまうのでしょうか。企業のねらいを答えなさい。

問11 下線部コ. について。これまで衣服や身につけるものについて当然だと考えられてきたことでも、近年疑問をもたれるようになってきているものがあります。どのようなものがありますか。具体例をあげて説明しなさい。

問12 下線部サ. について。本文では衣服はその社会を映し出す鏡といえると思いますが、衣服によって日本の社会のどのような特徴とくちょうが分かりますか。具体例をあげて答えなさい。

問13 下線部シ. について。本文では衣服に対する考え方の違いによって人びとの間に問題が起きると述べられています。

(1)そうした問題の具体例を下から一つ選び、対立する一方の言い分と、他方の言い分を80字～120字で述べなさい。ただし、句読点も1字分とします。

(2)下の二つの具体例では、なぜ双方そうほうが歩み寄って問題を解決することが難しいのでしょうか。二つの例に共通する理由を述べなさい。

【例1】レストランや温泉などで、入れ墨いずみが見えることを理由に入店や入浴きよひを拒否されたことに、外国人観光客から抗議こうぎの声があがっている。

【例2】髪かみを染めることを禁止する学校の校則に、生徒から反対の声があがっている。

〈問題はここで終わりです〉

受験番号	
氏名	

(2020年度)

社会解答用紙 (その1)

問1 あ い う

問2 ① ② ③

問3 ① ② ③

問4

問5

問6

問7

問8

(整理番号)

小計

小計
<input type="text"/>

